

銭湯はそこで暮らす人々にとつて、もつとも日常に近い場所の一つで、そこに体現された高い意匠性は、まち全体のデザイン力の高さを無言で語ります。とくに昭和初期に建てられた銭湯建築はインパクトがあり、その出会いをきっかけに小樽での銭湯通いが加速しました。でも銭湯の減少に歯止めはかからず、1969年に小樽に63軒、90年でも43軒あったのが、現在は5軒になっていきます。

まち文化博物館を始めることを決めたとき、小樽を起点・基軸に他のまちとのつながりを展示で示したいと考えました。小林多喜二が表現した「北海道の心臓としての小樽」の姿をまち文化を通して伝えられたのです。



道内で販売された歴代のびん牛乳

ただ今年には諸事情からそこまでは至らず、のれん・びん牛乳・湯桶・脱衣かご・ホロー・注告板・営業札などの銭湯文化を中心に、菓子文化や市場文化などを散りばめたスタートになりました。

【まち文化ツアー】

昭和63(1988)年に、釧路から開校3年目を迎える札幌の高校に異動しました。新設校の取り組みの中心に学校の特色づくりがあります。赴任してすぐ保護者や一般市民を対象とする公開講座がスタートし、その一つとして教員が小樽を案内する研修旅行が企画されました。国語科が文学、理科は自然地形、地歴・公民科からは私が歴史文化全般を担当しました。

バスの中では、小樽の基本的な歴史とともに、銭湯や市場、商店菓子、食文化など、足もとに蓄積された身近なまち文化の話をいろいろ盛り込みました。するとそれが新鮮だったようで、翌年からは私が一人で案内役を務める「まち文化ツアー」に変身します。

以後、岩見沢、室蘭、旭川など、日帰り可能な様々なまちを訪ねました。行事はその後PTAの研修旅行に位置づけを変え、私の退職まで20年余続きますが、圧倒的に多かったのが小樽でした。

従来のまち歩きといえば、歴史的建造物をベースにしたものが定番でした。それを個々の息づかいが伝わる現場めぐりを中心にしたのが高校での研修旅行です。2009年には小樽市役所を訪れ、単なる建物鑑賞でなく、市の協力を得て市議会議場を体感しながら、山田勝麿市長(当時)の話を聴く場面もありました。

点に足もとの歴史や文化を再発見し、その価値を発信する活動を2010年から行なっています。メンバーは札幌や小樽をはじめ道内外各地に在住し、活動の成果は随時企画展などで発信してきました。道内のデパートのあゆみをまとめた記録本『百貨店!』の刊行など、身近な営みをテーマにした出版活動も続けています。

小樽では、市立小樽文学館で2011年に企画展「街の色・街の音・街の人々」、2018年には企画展「まち文化博覧会」を開催しました。また、中央湯や小町湯で銭湯イベントを開くなど、多様な取り組みを重ねてきました。

あらためてふり返ると、小樽に関わる活動の多さに気づきます。時層を重ねたまち文化が現在形で生きる小樽は、まさにまち文化財産の収蔵庫です。そのこともまた、まち文化博物館の開設に携わる理由の一つになりました。



小樽市議会の議場
2009年

【まち文化研究所と小樽】



小樽の大國屋などの記録本
『百貨店!』2022年

札幌との絶妙な距離感に加え、小樽には札幌では見えにくくなった濃密なまち文化が現在形で生きています。メディア発の観光情報では得られない「ふだん着の小樽」。商店や飲食店など個人単位の営みにふれる時間は、私がそうだったように参加者を強く刺激したようでした。

小樽の濃密なまち文化は大きな財産です。まちの特色づくりに腐心する他の自治体から見れば、なんともうらやましい限りです。ただその一方で、年々感じる小樽のまち文化の痩せ方がとても気になっていきます。



夢二亭で建物等まつわる話を聞きながら昼食
2009年



小樽の中央湯で開催した「まち文化の時間」
2014年



市立小樽文学館の企画展「まち文化博覧会」
2018年

【足もとの光をあてる】

小樽で外せないのが小売市場でした。札幌にも昭和53(1978)年には225か所もの市場がありました。でも銭湯より急速に減り続け、今は生活圏に市場を持たない市民が99%になっています。そんななかで体感する小樽の生活市場は新鮮で、そこでの買い物は家族への研修報告を兼ねた格好の土産になりました。

その後、小樽の市場に通うようになった人が何人もいました。研修旅行で訪れた市場の7割はすでにありません。銭湯同様に減り続けてきた市場は、94年に10か所以上あったのが、今は5か所だけになっています。



入船市場でPTA研修
2003年

ち文化のすそ野は広く、奥行きも非常に深いものがあります。手さぐりでスタートした今年のまち文化博物館の展示は、その入口をほんの少し開けたにすぎません。

小樽に通い続けるのは、まち文化を構成する「ひと(もの)ごと」との時間を通して元気になるからでした。だから大事な人はまず小樽に案内します。この稿を書いている間にも、以前から交流のある作家が講演のため来道する連絡が入りました。

また小樽に行きたいとのこと。今年は2度目で、前回案内した食堂や銭湯が気に入ったようです。私の好きな場所はどこを案内しても喜ばれるのでこちらも喜んで引き受けますが、小樽の魅力の基盤がまち文化にあることを再確認する機会にもなっています。

近ごろ思うのは、私を含め札幌の人間の方が小樽のまち文化の旨味を享受しているかもしれないということ。人間味のにじむ風景を失い続ける街で暮らすからこそ見えてくる小樽のゆたかなまち文化は、北海道のかけがえない財産といえるでしょう。

この半世紀、現に私は「まち文化の宝庫」小樽で、さまざま空白を埋めてもらってきました。

【まち文化の宝庫・小樽】

銭湯文化、市場文化、菓子文化、宿文化など、小樽に蓄積されたま